浅間嶽後編 執著譚 一

へ13
3147
1

へ13
3147
1

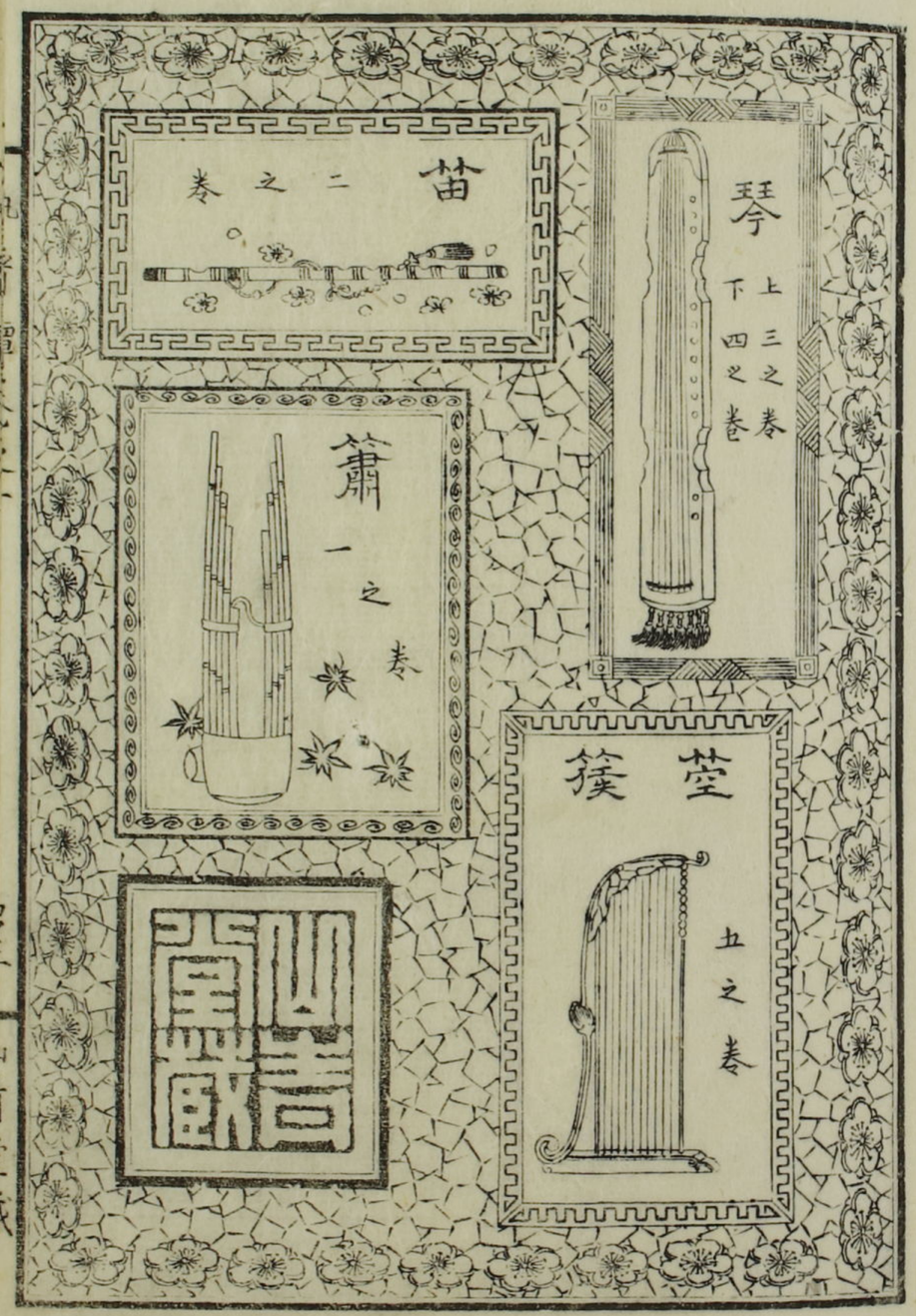
へ13
3147
15

執着譚序

鏡花問水月曰。汝有耶無耶。水月曰。子是乎
非乎。相契共歡。且賛秋曰。我倚勝乎。人以為有
我諾。諾。為無我諾。諾。故假象發紀煩悩。我以為箴。
假我得入菩提。我以不諾。諾。混。混。仕人之
所捨焉。儒之一貫道。佛之一切智。口而唱之。

早稲田文庫

而傳之何嗟嗟嘖嘖我脩勝手功成而去居與
而不棄德孰為焉無相子飄然至厲聲曰
已矣乎今都下有柳亭主者能以無為有以
實為無神變自在而可言說也近來所著
有執著譚五卷其化功必汝輩所及汝輩
誤而過言輒受後生之鬼為何二客相顧而
知所為愕然而自失忽爾而消滅也
余假寐朦朧間聞此談如有所請退時
偶友人種彦排纂來出稿本粉老托序於
余余閑裏熟觀之無相子之所採歷千篇
中因而煩他語以所聞書於卷端以充
己責之科云



壬申春

熹茶道人題於松亭

〻西窓下

山青堂藏

唐土台州
清涼山
石橋の圖

五條坂田字草の樓君
逢州

生欲渡雖言死不忘怨
亀未散駐衣裳莫西
艶色尋常看義象
堪翫壮士賜

題逢州　子彰

此歌ハ八妓女逢州ある客へ
盃をさすとき口まくらみ
あるとしるん

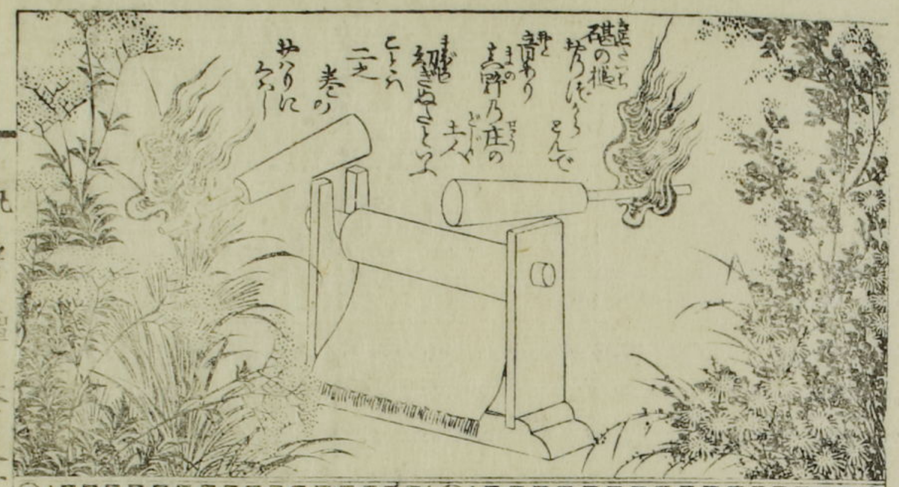
万葉集
見渡者向野邊乃
石竹之落卷惜毛
兩奠零行年

浅間巴之亟良治乃室
瞿麦

好賊星獸士右衛門

星獸士右エ門の
手下
先生太九六
浅間巴之亟良治乃側室
時鳥ゞ怨恨

俠客 御所の五郎藏
柳をまくれんとして花どころ〳〵
紛れに自害して汚名を雪ぐ
忠あり義あり
彼が不幸を
いうせん嗚呼
袁氏の遺
臺一花を
風乃科
高清亭
逢州妹背居中
仮に舞女牡丹と
かのる



浅間の老臣
雪枝 弥惣太の一子
同谷小織の助

芭蕉十番
蔑勺合傾城

ちる神や
さくら咲ぬ露れ
とちとち狂

三翁

五郎兄女房後に遊君
杜鵑花

拍子
切平

繁別執筆譚

一名 宇朝長恨夢

八卷 想因錄

滅國後編

作者 柳亭種彦

第一

巳こゝ西花御殿つゝる所さ乃一欲が娘
高貴ふ先ぐりあひ茅屋の借書を沼る事

第二

里子の草ゝ長いそ繁別 附島姉妹乃
心昔とふ沼竹巻の 髮麦恨の風ふち沼事

第三

髮麦の方 保夜に附ゐを殺害かも
男波乃 第恩必に順くくとびさる事

第四

附島ゝ亡宣徳この 芳恨とあ〜ハ〜
髮麦 犯死沼 ゐろ〜ぎぬ名の事

第六　巴山蜀が洞の山荘に居を集め
　　洞を九に分て中楽桃花を思ふの事

第七　入唐花枝繪花を見て登門を敲
　　た唐つ山なる乃仏をうごかす事

第八　客居世ゆゑして客仲の世子をうたふ
　　牡丹が戯悔拘治晴に冊子再會乃事

第九　桃人は家に良治の小止を治神乞の
　　如子弟をとゝく良治に法いつす事

第十　良治夢に清宗山に訪く石橋の拘治
　　金色乃柳子を牡丹の花くらふ事
　　客居世又乃仙をうり古流の
　　威徳を有つが妖仙ををぢく事

清涼山文庫

清涼山文庫藏版編

著列執筆譚之冊想目録畢

板元印
山青堂

上

ゆふ天空すてふたうきの乳の山をかゝ[illegible]はけいせき
山にとゞけいぐり驛洛乃鈴を振ふやいづ星ゆゑ
もろふ乃拘治を地い懸の牛ゝりでかゝりゐる
しくもちけいぐるあふ別がくもすがゐあり
ゝどゝ乃年をあゆゝむがどくゝ見こゝるハさぶゝら
ゝ廊にてくるハ法やへとゝ女ゆ人
暇を忠はさゝねどゝ心乃かゝりやせんと
はゆふたゞひたもとん為のせい命をぐのせ懸と

かゝるほど

[中略]

[illegible]女乃地獄さりとてハ二六財布にたゝむきかくゝ
之時線の抜足忍ひよりとかん酒乃
きさはゞさたく熱燗をのむとく芸日は酒宴歌は
多能相ゑハさてゝ[illegible]
ちつけ[illegible]んで抱くせんそまらくゝとぞみりかは
小ばなかいとり神ちかゞ
[illegible]振袖乃むに見はゞとれ外すくと

[下略]

左ハ外記節の逢州浅間が嶽懺悔の段[illegible]
[illegible]狂言[illegible]

浅間嶽面影草紙後帙

一 逢州執着譚

蕭卷

緯度著

第一

巴ゝ亟花街に到夜園一齋がむまめ
忘貝にめゞりあひ茶道の傳書得る事

夫勢ゝく厭離きらゞ[illegible]さゝ愛欲に軟ゝるハる。人ハ愛欲のゝちに独来独去
善悪変化。殃福異所なり。仏経にゝ説ゝ[illegible]ハ愛欲と執着
[illegible]の迷ひ。いつなるとゝろ生ゞる。目注ゝく想をよゝ。おゝひ熾ゝく
愛ゝ[illegible]。愛感ゞゝ。遂ゝ男を摩[illegible]ゞ憑通ゝく色迷ゝ。[illegible]
ゝハまつゝく畏をなすもの。ゝ[illegible]ゞ。なゝ愛執の冥路迷ひ
魂魄宙宇にさまゝふゞ故ゝ。仮に姿を現ゞるもあるをゝん。かゝ言ゝ

言ひもくんやくる。花尽逢州さかる類にやあらん。さくも京都将軍義満公
八。往、永和二年戊午の三月。室町の新館に移徙ありてこそ。花のはた所花室町
殿とも称ゝ。干時宦領武蔵守頼之をたゞめ。聰明睿敏聖賢の矩に
かなへ近臣衛中にそち。頻に四海升平ゝ。さらく弓箭の塵をたゝいさ。
其ゝ一莖九穂の登歳なり。花よめぐ月にうゝ。花車風流を好
むあかねく。田楽白拍子早歌催馬楽なんどもくて代ゝ。
さきに都五条坊の曲ゝ。塾雨昔に倍し。歌楼妓館十字街にそちつゞき。
糸をまんゝべ竹をなし。娼妓舞女。袖をつゝねく。西と東にあさひつ。花
ゝべき容かすゝ。飄客のあしにさそふ。月と見るまで顔ゝ。玉簾の雲
まかくる。緋の日傘ゝ烽雪の横るゝ。さゞ黒漆の駒下駄ハ玄霜を踏ム
こちとゝく。是仙境と似ゝるの慾界玉と敷く白雪のあくれば消る堅氷ちゝ

霜を披月をゝび。頻波のあゞくゝう来る拝人ハ氷を擔く井を填るがごとく。
金玉おくる期ゆう愛情つくる期ゝ。遂と楽呼然然を生じ。方を亡ものゝ
さゝひにやいゝゝん畏るべく慎べゝ。爰に浅間巴ゝ悪良台ハ永徳二年三月
のころ。陸奥牡鹿郡をうち立。都在番に赴ねど。愛妾時ゝが病ゝ
うちこのひ行くまゝ古郷のこゝのまゝ。鬱結とゝ。公文に楽ゞ。
斯ゝゝ所為とやゝうゝん。家臣のまゝめにまゝせ。納涼にかたちつゝ。弐夜
花街にいゝ。かゝる光景をゝゝくゝ。や積鬱を散じゝゝ。漫行の悪提
等。已ゝ亟が太刀の柄と袖をひさうけ。會釈もなく攫ゝ。其上同子ゝ玄提
をゝび集ひ。飽まゝく悪にゝゝ。忍びての夜行すゝべハ。二三人の白
晝者のゝにくゝ。かゝる多勢にあゝうがゝ。殆発くゝへゝるおゝ。作所
の五郎孤とゝ一個の侠客。六方ゞゝにあゝく来ゝ。悪提を取ゝ投のけ。

巴と亟を背にかこ金剛しちに立隅て。是はそ浅間なるあぐ〜の君みく。
止受なるさ巴方なり。ぶ人る亟れたるく奴等あ〜べ。一人も活く飯さ〜と
罵てるれが亟提ち人。猫を見る鼠のごく。何地とも なく逃行り。時こ瓜
花街にかしびるるさ。逢州とのふ金盛の抵君あり。おりぐぞも今の蹂動よ
る。揚屋る通ふ路ぶふるれ側に傍徨。のくくおごろくけらひもるく。あ紅
の總角結びさびし。涙弦の国扇るく。面ひる上埃をうち弱く居うり
ふ今御所の五郎義が浅間の君なるとう〜。いひつる弦世とひとし〜。蓮歩
軽〜うし〜。自巴と亟が手紙とり。最危とに付るなど。懇懃に労て。落ちり
し扇疊帖を悉をし〜取あげさせ。五郎義とうち連ぶちっとある茶ま
の桜る登り。逢州の仏名人。過刹に五郎義をのいひのひ〜を歩行る。君人
ちさし〜浅間巴と亟良治公るく在ぞ。そも何等由縁あるく。軽ぐ

まく。仏処る到てのひし〜呼人る仁巴と亟もかるるどおごろこ。げ月いに
我名ぶまるるんと。ぶ弦詳に問ひあちこ〜めんとひ〜ちり。花車一人走来て。
逢州主人や暮ちきにく急せ人と俗〜れが逢州人残多げに坐を立上り。
ぶ花街の風俗ふく六夫る停ちちる集ひ場屋いりとのぶ人今人
ムセさ仏れば暮なが妾が坐敷る結。寛よかるりすきん年頃今まの色
〜。具多ぶ〜〜ぶりしるつなる風る君ぶ神の巷になびけんと微
笑古ふるまるるに裾ぶあつめく。いそぐべ〜く材子をるぶり名が巴と
亟こ〜に不審されど。抜女とのひ。仇をるひ我を浴く敬人商ぶ〜わるる。
何等縁故ある者にや。其変ぶ〜や語ア〜く〜と問ひあ人が五郎義人涙を
ぶ〜ぶ。前数ぶ〜ふく面ぶ〜。新宴る姿とな〜ふく。名ぶも市所う五
郎義とあ〜〜るつまぶ人ぶ〜ぶも宜なる。若年の初人君の側ふ仏ひ。

頂法角伝ふくひとつひろまば巴ゝ然再びおぞろこされどこそ行とヤん面貌る
ゑんおぶえありこいろくぐと。其人ヤりとへきつぐりこ五れ了角のおろなゝしが。
らくと我をゑ遠つど。過刻に酔奥の奴等を退退け。危急を忽をらひ。
三世の寄家おぐるゆくわやあゝんぐゝん。隔なくき言ふ赤に五郎義の女めう
しくと涙ぐめうわ。若気の花のわぐしゝ公。母君遠山辰公の侍女拄飾花
ぐのと密通し。既よ結首よ刎らべくきとろう。おもひうけぐと遠山尼公の内計
ひみゝく不思義よ命ゝとるのゝゝ。雪ぐのハてし門恩報ひ奉るあゝ方ゝと
ちゝゝに甲斐なく。疾と無常風吹ゝ。代世城去のひしゝ弔悲しゝ。斯今の国代
へぐゝつきゝ墓にゝ人清なしゝ。朝ゝ夕ゝおひぐゝひ折に幸ひ君
都にいるのひしゝ風よ伊。露大恩を報せんと。命ながら寄護ゝらせしん
言の赤ひを神仏よあのをとやゝゝゝん不斗もめぐりあひ奉り。某が

喜び代ゝくせのべきこと。ぐめゝろ代物がゝ。美酒鮮魚をとゝのろ狩出て。
ヤ代ゝ五人の哥伎をむ人。ゝ代ゝ漕。今様の早歌なんとゝ。ちゝりろく呼ハ
せ其実我面よあゝゝをゝきび。巴ゝ悪も彼が志の切ゝ代涙くゝろあび。
ゝゝゝゝく言ふハゝゝ五郎孫世代きのび対のゝくハのきび名代めゝゝ思ハ
宜ヤゝをゝ。御所ゝゝくる性ハ地名とゝ。是に一定因縁めゝ。張
ゝくゝゝゝゝ五郎孫ゝ矣ひ。ゝ生ゝゝ程共ゝ仇ゝど。往年青九八日。
雨風のゝぶきゝ夜。鞘当ゝ言ゝ。ゝゝ変おゝゝゝ砕狂の客手に白双
をひゝ拒。おゝゝゝゝて走ゝ。ゝぐゝを乞返せゝが無念ゝゝ。知るゝゝれ多
ヤゝ。往来の客に三五人。傷疵をおいセゝ愚者めゝ。小子彼砕狂人をゝゝ
ゝ柳巷の騒動をゝづゝゝ。時に五月廿八日。善悪をゝれぬ五月暗。其ゝゝ
富士の裾野にゝ。曽我五郎時宗を。市所の五郎丸が抱ゝゝに髪髷ゝ。雑

つとなく異形となり行く又市所いつに因新開荒義二宮太郎ちぼ梶わつ
平平秋父重忠なんど鎌倉武士の名をかざり大一大万二瓶子三瓶丸亀
甲或へ花勧のうぐひを添し湯帷子を着かつる侠客悲小子にまつぐ
ぐ夫はそれ君成仕茶
供に俱せらるゝ。夫はそれ君成仕茶
夜歩行のおやもあるべし。
逢州そもゝ全盛の花魁なるが。
田字草の長が許に行ぐるさ。
君よかれ〳〵逢さくもさなんど歩るゝ小子文に不審さるゝ。
行〳〵と同已〳〵巫頭をつる。香我も其夏未詳ありくゝど。彼が言葉に今青我を
むくゝ。ねゞ〳〵と言つまべ後まへ花来変のやうに知べ〳〵と仔細よかるら万に
拝見一人行公かゝ接にのゞ。巳〳〵巫を。〳〵〳〵。居をたゝ〳〵さく去たゝ〳〵
かゝ。ま自なる面さへ色のゞゞく。紅梅つむ夾の雪のきゝよいゝゝ面ゞり
ゝゝ〳〵。侍〳〵べ〳〵る五郎義が側よかゞまり居まり。巳〳〵巫に是ゞをゞゞゞ。

杯ようゝる顔を熟とうちながめいつた五郎義汝鈍にあゝ〳〵其頃ゝ母君も
いと優にまし〳〵。我も汝も前髪あゝ〳〵。斯二人ゝも面智るに歳投間ゝゝ疾へ
其日に我家にあゝ〳〵。洋のゝに知ゝざりし。袖の渡の花ゝの〳〵。家原星影。
土右馬つとゝ愚者。我恋のあゝざるに恨にあゝに仮と壮節花が密逐
祝祭し。常言にいゝ吹毛さく剣にあゝ〳〵。
放出紙落し。三人育〳〵其帯ゝゝ。
いまゞ角添ゝ妻ゝ。咬や壮節花に待るゞ〳〵夫さくゝゝ〳〵義ゝ
〳〵不義にめゝゞ更ゝゝ中とゝ天のゝ〳〵せる良縁ゝ〳〵ゝ斯合ゝを
にかゞゞ。者侠ゝ。かゝるめゝゞ往方をゝゝる。蔵乱を市ゝゝさゝを
〳〵盛ゝ我に〳〵ゝ。〳〵徒ゝ六年めゝの夾秋を過つゝ。懐旧の涙つゝ
かゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ五郎義ゝ漫ゝめの悲〳〵。〳〵紙〳〵〳〵回答ゝ〳〵〳〵

中なり。巴之丞憤然たる涙をとゞめ中にも五郎藏さんの歎そ。今日たゞかくならんとおもひつ
あひつることそ幸都在番果ての。國の老臣にも申しあげ。陸奥によびむかへ。た
の武士にとりたてさせんと言つるも何事やらんおもひ出つらんや。笑我
なからうと思ふなる世の心ばかりや。此事は今語るともおそらくは異なり事ぞ猶
あらく問ひ申せし。杜鵑花もいと健なるか。愛子はいかにもなけしやと問の人が。
五郎藏側に居る拾民の手紙ぞ。巴之丞が前に打ひらかへし。申し出るを面伏
なるを恥めきにても小子但年痛よかりて。綽掾つさくく答へもなく。彼逢州主
とおるが長田字草のかくろ拾女に賣僕の金に身をかへて。我妻にしもく
妻ならぬ武拾女こそ杜鵑花がなしき果てにひと語るうちより彼拾女を熟んで
るに果しく杜鵑花なりしをみておもひかけずそ。巴之丞ハなくなくも打
かどりき夫も彼も涙をそゝる挿なりけり。杜鵑花ハ只面を赧却退のしにて。

…とやわりく居める所に居ならんとんなりひもつかざ。漫に此
梅よ登来て。かく婀娜なる姿にうくめひまいしさるを面なくぞ。嬉しき
ちらにかりひ出せべくもし。かしこ涙よ絞る。袖のうちの櫻どぞ。悲風もえ
にちりてゆく。才ハ爽なかし秋さびし。白河の関うちちるてく。ちるけき都よ
ちまむさん。阿母居より多かる金へうすかひしかど。女夫とも泣汁のきらに沫ふ。
聲にも坐しく。恩が滄海もつくるの期あり。一蓮では啓花の梢へいそく志ます。
となく。知方のかくにある田雀の。とのしくなりし。其うえ五郎藏が長病若音
飾や側調度さへ。皆賣つくして。除方なくいらへるべき鳥の卵のむくかりが也
まづ身を委亜よ懶骨墨の似気なき年に恥させぬ。鹿子目結のひんきさ。
面ながらひたにハ泣く待間をまちねるとて。見るにれば。ぬし暁の締へ忿く
帰…煩悩の流先よりなく。織玉の中の擲玉とや言ん。苦海の中に苦

しく。変化女なれど其名あるのハ侍らましぞ拍俗を。五郎義ハ目をかく言葉
よ。そのかぎり人多くも其心をえて。浜撥払ひこらひよまぎらし君にハ気乃
むとぶやき試ひしかんと。抱里にいうりのひしのんにかやくも志ありがちなる
ともえし我なれし絶まして。嬢かるとも堅を㨿朗録などと見ひなれバ。
巴と咽も涛むうさとまちかくることなん心を署もうてすなる。我国の飯アる後
へ兎も角も討ひ杜鵑花をも贖ひ出さんと宣ふよ。二人が斜めならず喜び
杜鵑花ハ畳紙より鬢櫛とり出し巴が鬢のそゝけを撫で撥あげかんざしとる
間に金烏ハ西山に傾きて清水寺の晩鐘鍠々と音冴て。是なん解語花を
催す羯鼓ともいふべく。数の嫖客我かとくじて粧ひをとらし。天赦一ノの連る
かごく大路を商ひとくさまれ心言葉ふもおよばずされど。杜鵑花ハえトより
里馴し女なれバ何くとも心をそへ。蒲延資ろうく。巴も患を宥め撫近くろし。

ありしものハ其中に数々ありし。唐様の往にうつる黒髪ハ尾花のまゝ名とうちこぼし堀
崩しに水東絞出し裕にそめしハ汀限の衣に名高き糸屋の女夫に侍るなり。
茶巾袱の紋をつけ笠と簪と橋をそめしへ背の隠語。遠波の衣の紋さまに乃
君とうちに侍る。拊子と碁局の髭子いう。小粟くづしの今様漆白野の長
けく孔雀の君とやいふ。揚羽の団扇よくづくしの上袷いうも。かうかぶ衣の何
甄姫。乱菊そめしハ力命大夫甲乙の衣ハ孤蘇の君。大小の丸うねもらし石
松屋の小馬。白女横菖蒲に物の本ハ珠藻の衣の中居說音次なる字
男香燻小児とう号侍る。されバ悉皆鳥江にハ緋衛なんどに名高うりし
抱君をとまらひ其名氏をひつるゝ兼ぞ侍るとぞ。おぶえしまに物語ろうまべ巴が魁
も治世よりぞ又盃をめぐらし。此時逢州ハまとにしく後によひさうぞ。一ト粧
をこらしく様ちに出しが。獨に見つるうちハ数色除場り。雀の群にまぐる不

似て今まで花と見つるも此花よ匂ひを穢さぞ数の抱女ハ唯常盤木の
いろかはる事なし。中あかりて逢州再び茶みせに来つるあいだしそれまでく待ねてく。
老女と禿をさがらせの外に残しつゝ衣のかくしてひそかに楼に登り巴ゝ
が側近く居より。過刻よりかけまくて事の中にかへあげぞ先ぞ見るへと。
手爬まつめる巻物とおぼしきもの代ごしたせへ探し熟覧しく巴ゝ大
にわどろきぞ是まそ我多年望みてきるとよろの。茶道伝授の秘書にして奥
書は。園の一斉とあるせしへ則我茶道の師なり。此者いかにしてかゝる口伝を
持りやと向に逢州ハ双眼に涙をうかめ。妾ハ一斉の娘忘見とやへ者にぞ侍る
弘文一斉。君より多なる金をあづかりまいらせ。門諠より飯あげ盗賊に出会
彼金を残らくうばひとられ剰手疵をうけ。むなしく其暁の星まろともきえ
あくまよ君のまへいかやかつこん。せめて茶道の秘書なりとさゝげまいらせ。

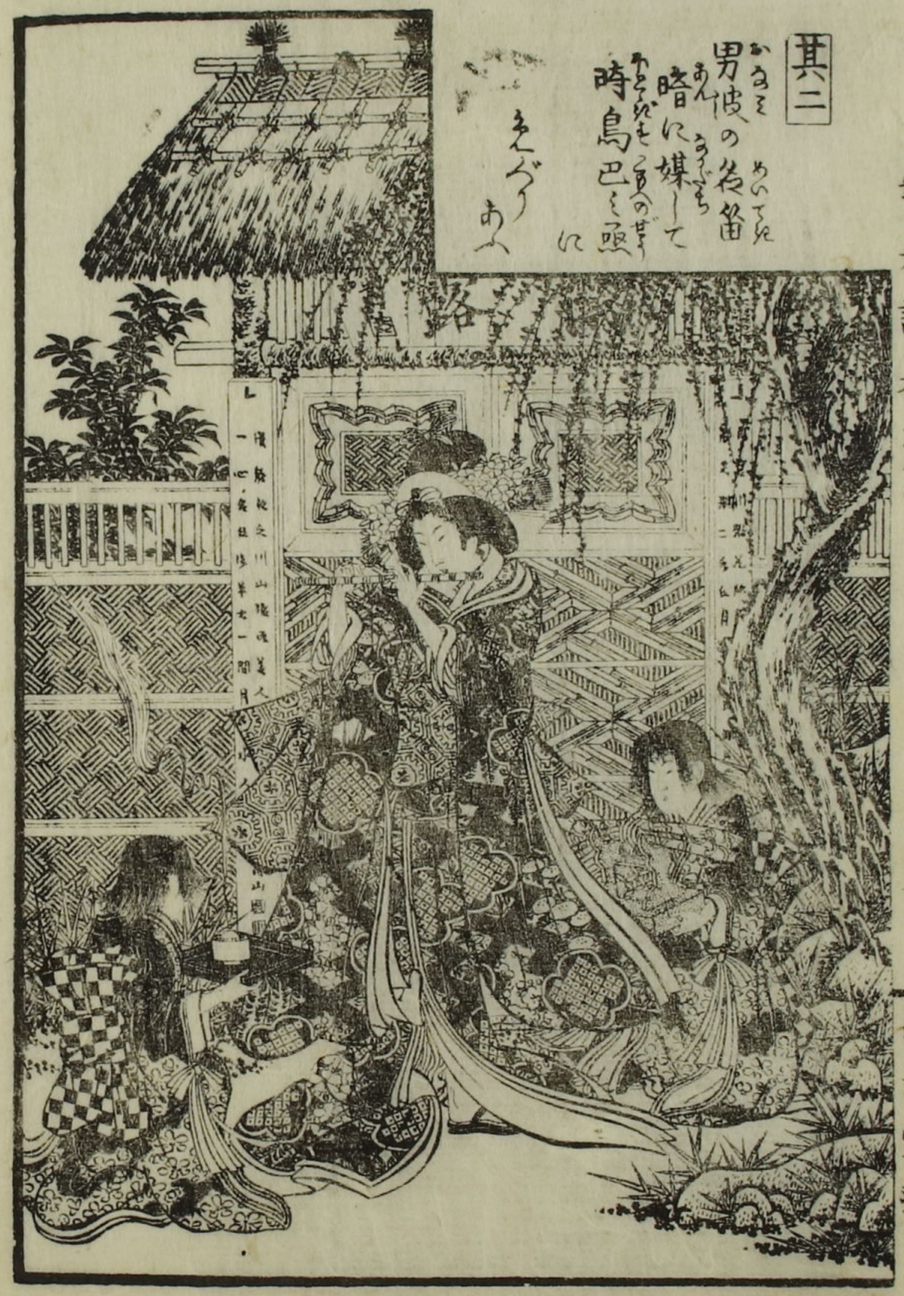
其上ハ罪を贖ひ。まつ云ハおかうかし。未五郎ハおさなくして鍛にまいらせん
何もかく。鬼や角なりひ思しるうち。むなしけれる仲父まえにかゝみぐの幸
聞人くて。遂にかゝる憂目にぞなりぬると泣くをき、巴ハ思も
暫くあつて我も一斉が非命の死を聞ぞて。園を立退ざる其昔斯と告
つげ。なきにさしおかりと恨める言葉に逢州ハ唯悲しくて泣杜鵑花を蔵
五郎丞よりあひかけぬとありと或ハ歎き或ハよろこび共に奇縁を蔵
しる。ごく杜鵑花巴ゝ呼にひかひ逢州主とハ姉妹のごくかくひまよせど。
一斉との娘にくわゝんとハ妾さん志しざりしと言に五郎丞よ側より。杜
鵑花の公つきるも宜なり。我ハ若年の刻君の使そして。一斉どの家に到りし
くべ幼年なりし逢州主を見まいらせしことあらんが今まで夢そまた知ら
ざりしひ思とべ最幼き女子ゆゑにて離れて居らひ。かそもとにくやかくさ

うち笑ふに逢州は歎のうちにも恥かしく。其わけはいはでありけると。衝口に發笑。
無益周章して。さぞ心なの女子やとおぼすらん。さるにも少しくおもへば其傳
あるは君の方にとめおきしの人とりうを。杜鵑花はそれありかして盃をとりあげ。逢
州主にも竹葉をとうしの少しく憂を払ひわかれとさうめつ。少時めぐる盃に巴が無
も大に碎然發し逢州が散なるに心やうつりけん眉さかり眼さかり憂貌打ながら
を。杜鵑花は疾その色を推し。逢州が連来りし老女にむかひおのれのへと
私にかたらひ老女はそは敦く楼にのぼり。君にはいづれの花まゐ一夜ありけ
さんそろくいかがあらせ給ふべからん夫彼といへるうち縁にし深き逢州主のあくに
いらせまつば我とかはらぬ心ならん杜鵑花ねがひにおがみ候と巴が
むかし出つるくるゝ言葉に巴は点へてなく多言弁も言あくらず流石面なく
や。尖がけの韵をそむけ。よろしきに斗なひてよと。他のことはいはぬ。杜鵑花は心に喜び

つゞ逢州ぬし君を誘ひまゐらせなば戯言めきしつるこゝろを治ませ給へといへど。逢
州は説きし赤らむは礼なきことなるゆゑなかなかに。いそぐ君の袴をとらへるべき
こゝろもさまにむかくなせど。巴も満面に笑を含み。心爽やかに見えにける。
おさるれかるまひや鬼まも一角まも田字草の家にゆかれ給へと。杜鵑花も心
ひらけまつ先にすゝみて立出ければ五郎拵は明日来りて。又もや会まゐらせん
と。巴が家にかへりける○さても巴と逢州の二人の娃君とうちつれ。程なく田字草
が老の家に到り見るに少し奥まりたる処あり。是なん逢州が抱主にて
経営まふけし坐敷とおぼしく。前に透垣ゆひめぐらし。ちひさくは廣からねど
庭につくりなし。むつかしげなる大路のさまにはあらで。木立に趣ありて
見えたれど。今まづ常殺にはいる。閑窓深うして寂寥たり。時に逢州も巴
を奥の楼にうつし。女童に命じ。瑠璃燈に火を點じさすれば水晶の簾に映ず。

九
青譚卷之一
十
山青堂藏

九
青譚卷之一
十
山青堂藏



異國にありとのゝなる夜明簾うとおもん生。高麗百濟のふーきにや衣桁にかけ
足ーしゝる袿へ九花帖とゝいひつべし。床遠柳に唐匣蒔繪香柳紙ゝ。基盤双
六盤。貝柳追松ぐぐり文字ゝ。花結びの類。ゆくあそびのくさ〳〵人渇う
とよろもなくおれるゝ側に大ぢなる竹巻をとゝ人最うるはしき唐曜麦弦
結ゝう。初なく座廊に人のけはひしゝく。女童歌女うんど。数多酒肴を持ゝで
ゝれば再妻よ酒宴をひゝき。目列ゝる歌妓ゞ舞ぶりにおりゝども盃の数をとゝ
酒宴ひ闌と見えゝる弦。社餘花ゝまとゝ。ゝづゝ。あうあゝぐゝとゝち連ゝ席
を退出ゝう

其三

田字草ゞ長に〻く逢州時ゝ姉妹の
後のゝ弦ゝと竹巻の曜麦恨風に散事

其疾ゝ既に文ゝ。雷公遠くひゝ。雲のゝくゝ側ゝすゝゝ。雨ゝとゝうち

そゝぎけるが程なく雨やみ雲ちりしとおぼしく。月光窓をうがち。秋ぶかげなる蛬の声さへ物がなしく聞えたり。斯て巴之丞は須臾鴛鴦の衾にまどろみし眼をひらいて枕辺を見まはすに。遠州は閨に起なほり。屏風引まはしたるの手づから打扇て居たりしが巴之丞が目さめしを見て。宵よりは三味線も奏で。四更にも迫るべきに。煎茶一碗きこしめさずや。竹葉の酔をさまし給ひねとさし出せば。巴之丞はうれしげに飲終り。何とやらとお前様を席に巴之丞言けるは我年来不便の者に思ひつる侍女あり。名をおと呼ぬ然るに汝が容貌彼女にはよくも似たり。若姉妹なりしにや実に空言と言んは汝にも妹ありやといひければ遠州いふも似なる面がはりして。宣ふごとく一人妹も侍ひしが由縁ありて懐腹こそ異なれども妾には似もやらず。其時分方とやら申さん。何等の家の姫君にやかくおはしますと問。巴之丞答て。彼は高貴の深窓に成長しとひいわもあらず。丹波岡本の郷士某の娘なれども。彼は四才の年淀の夜舟にて

暗まぎれにはぐれたる迷子にて。実の父母は何なる人ともしられざりしが。其むかし母は病のひまもなく。姉と乳母を共にせしを子心におぼえしと侍る。然ば遠州は膝もとまでゆ。その上にしあらば妾もおもひ出ることの侍る。妹は往しさ中なりと闇にまへ侍りしも。淀の夜船の乳母子が宮に遠くはなけれど。妾が実の妹の方にへ。證拠となるべき品もなけれど。はぐれたる後の妹の守袋は笹蔓錦とやらんおさへて「その中には一寸八分の観音にやあらんといへば遠州忙しく詰こそだけにしく来ろしめさるや「よく聞さんせよ」その二品は不朽なる女の養親こそ信るが実の父母と。木の郷が彼に給はりけり。さては汝の妹にくあらけることくうれしとなきまゝされど打おどろく。美とも言へるねど。遠州は声をのみ。彼はへ実の妹今は何地に住て。旦夕おもひ出せしが君の御側に侍ひしか。嬉しやせめてその顔はよく妾にも逢はせ給ひ顔見せくだされとうち泣ば。巴之丞吻と吐息して。是れも

さこそおもへども爰に一の難義あり。汝に少ふる㕝便なきぞと我室瞿妻と言へ。
原雲上に生立ちうしひし女臈なるが。天性ふかくとましく時〻に嫉妬まさりさ
妬くおもひ。去年の秋三五の夜時ならぬ月見る莚にまねきて。彼原来田舎に旅
去飛去をまつらぬ汝が出に侍る侍女と示合せ琴をまつべよおたえ詠よと
さまざまに責呵飽まくに恥辱をあたへしことあり。汝も家人連ありながら又いつ
なれば憂目やみん。これ瞿妻を退んとおもひなりぬ。時の大臣なる師良公の女なれば
容易ハあらひがたし。其ゆへ時をも良夜に嘲せらるを公氣をも労しけん。遂
に病の床に臥面上に悪瘡を發し。風の燈火草の露きゑるに不ども命あ
おぼつかなし。公の命旨止がたく。むつかしも華洛にいるなりゆきぬ。今かや冥途
の鬼となりつらんが。我を恨みておもかげとなりぬれ。告もさぞるとおもふたるなかし。
仔細よ我が身の遠州にまかりし落る涙の間に迷ひし世に妾なとぞ寠

しれものはかりけれ後の妹の寄居虫をか今は行衛も有てなすくの。そのさきいばぞ袂
ちぎりし色の水巷に水馴棹なくしぶの雫まつ。袖はかわくね楫まくら芦
の一夜のかり臥に我の妹の行方ハ夫とまれ。それ陸奥のちかの塩竈近かきね。
雲井に昼から雨香冥途の香となりつるにも妾に泣とふ腹やあらん言て
かへしね周遊なせし。花待に来るその主をむもろ琴をもあくべく總
く容儀むつふるに典となすべき秘藏はおまさるになすし。公に侍る姉が琴の調べ
殊に浴汁のよねとくなり。妹が琴ぞあくべかし面なくて病となり志るぶる
も辱かしんあくべからざる辱なせし。三人の姉妹かくまでも辛目見んつる
へ前世にいかなる罪やつくりけんと涙袖にあまり。泣を悲しみ果べうもみへ
さまぶりかなきと我言出しと己と思ひ悔なりひさ歎きあひそ。一定死せりと
いふにあらま全快なすべけれ汝を為にかざらむ人やいでて對面なさまとへしと。

[illegible]又言和た右に顔をうづ。一面の玉笑くあり。玉磯に水にちりうく桜花を香骨
螺細をもうく楼。又拠膝弊くの文字あり。是幸とえおろし。遼州がまの人にあ[illegible]。
とうるへいひ出とき毎に物つぶ[illegible]よりぶとつるに拠奥のおりしに[illegible]を失へ
ず。先孫敬雅摂に歩く。叢林に[illegible]とべーといひ[illegible]遼州へ退さがちにく。
[illegible]に手をふ[illegible]いくで姿弊[illegible]に[illegible]よろとべき。頼へ尼一曲を奏[illegible]
おどろうせのくといふに巴〜恵微笑に対花街にかもに[illegible]。そ[illegible]に師に
むく弊に[illegible]花をむもび。客に[illegible]る奥となるといひつる[illegible]を忘れ
〜やと言葉のとらに殆に殆方なう。報然とする顔をあげ。ドーなさと[illegible]言ふる
へへ為に[illegible]。花女のあさまーさへ雅燕なる曲のくつね。こなう。雅音へいびち
へうきえ[illegible]ぶ。そまへ彩せよ彩せよと。おーへくぶふのろーぶーどるくお調
[illegible]んとうぬくーげに梁[illegible]ーー燈に[illegible]ーけ。ろうをーまー調お撥あへせ。

公に[illegible]。彼へ原雅楽堪熊の家に秘さく奥笑をとうへ。[illegible]
今[illegible]へ調ふる彩声かれば典に〜〜倍声にすぐ。巴〜返へる
欄を脇に[illegible]。少時歩をあるる。狂雲月をめ〜。さ〜〜と音さる[illegible]
や俳出んとあり。さけ[illegible]へ彩ちる[illegible]青柳の涼しさ[illegible]に中〜[illegible]く板庇
をさらふよそあるる。時に不思議や笛牛のおと遠に[illegible]へ漸〜に通ふつ。
[illegible]笛に次へ[illegible]笛へ弊に[illegible]。
琴へ笛に[illegible]清雅正に澄ぐ。青[illegible]音様〜合度清遠哀怨と。程柏子こま
ちなり。巴〜歩へつと対をおもー。む〜所や昔唐朝玄宗皇帝。蕭庸とい
地の行成〜〜。拍仙笛をつる。我そ[illegible]に紀伊岡和歌の浦なる弱牛
ま。横笛をつ〜と吹。男波とかぶけ松籟せ〜が。彼笛の音にくま肖う。
何人なーん[illegible]。彩に吹ける焼竜をろ〜〜てし[illegible]。二[illegible]

兄なる手弱女女郎は元の佳に留に添く手をとらへ。地摺ばかりの両袖の袂よ
り夜風を含ませ。紅裾飄々翻る形勢は。仙女なんどの媚さもかくやと
あやしまるゝ斗也。目もはなさず見まもり居る。折しも雲のかくれ月いと明く
てりまさり。燈篭の火影をはらはらと見るに見る美人は。打ちかけぬ面に淡
せし時分にぞありける。已に丈夫におどろかれたれ。燈篭より目を外さんと
すかりに燃あがる。火影に此方を見あぐる高楼に時分にあらねども一宮の
敵なるや「これはお姫様かけさと互に言ふしも知らねども女ありくや時分。
にいよいよにつく此所へは参りしぞ。我縁あるべきとも多なり。先此楼に登るべしと。
夫より衣に見あぐるもと後のくなり分時。翼なければ恰もなく。月影
隔つる紙の松。そぞろなるべしとや壇師が。かけかく階子を幸と雪なる腕を指
のべて力をまかひもしのく悍くと。新たに持ちかけまるくと。己が魚が前に来り。言

不思義にも九死を出て一生をはむ。ちゃ常にかへりしより。只管君に逢まゐらせ
んと難波の方より夫のゆくへの由をきあげ。鬼も角もその命をうけ。道ならぬ妾の
旅なれ時もなく徒に。月日を過し経る中に顔を見ず足もとをも遍歴
には館へ到着せし君は下へ此花街にと世の噂と風と聞。此男波を招
まねしを幸。声々に見る音ながら。章臺に咲ありぬ。よもやなどと尋ね来り
せし果して此楼のうち。命を得む妾が喜び此人や結ふべきとぞよくや見せしが
遊州がまへを恥るちに微笑てまたをつ人又に礼は乱すさりけり。己が恩をなのめに
よろこび我胸をいかる刺へ。おとれに力をつけまして勇しきとあく世へ云む
いと出さぬなど。手のうち陽世の。さかすれ亀になりきんと人去らむと涙おとせし
おかしなありとおく清くしくなるのみ。昔にかくしね縁なる頼となりてる名を優
曇鉢華の。さうりいや比せん。字本の青亀大空をみるに。ぞ誓言ん喜びの其上に

又悦ぶべきことあるかな。是なる遠州といふ者は我茶道の師匠の一番弟子が
むすめ。忘貝といふものにて。淀の夜舟にのられける。およぶ実の姉なりと聞ど
不審はなきにしもあらず。さてはかの人が姉上か妹にてありけるかと側ちかく立より
しばしとおもひしに見例まつれば実の姉妹なりと見へ。姉も妹も劣らぬ形勢にて
笑のうちにも泣もせず少時ありけるが。時香が嬋娟る粧ひに。心中秘に怒
を生じ。己し良に対つく言ければ。時香の方も中々に去年の秋より病にかゝり。
枕をもあげず今でもし死やせんと思ふなど。定めし兎へ此ろさか人て。此女郎
を見侍るに面痩もせずして。曜しさまも天に似。おのれに妾に妹のあるを
ば。杜鵑花ねしに牡丹のなれば側室のそのうちより。媚ざまよ見を撰出し。君を
まちね面かはりのよし。此所へよびよせる花よきまだも常盤木のいろも香も
なき妾が姿。乱鬢るゝいとわねど姉妹のなかりせばやましやおとにはくもらん。

あはんとも鉄な足にかき。如くるとも由りさせなんと。いと不具気に見えて実にて四人の
愚は案にくれたり。時香が中すの頃に使なりしが我も未だ祥おもふところなり
と。なほ審に語んとするを袖を引て時香のいふやう總娼婦白拍子なんどの
別に計策をまふけ。男子の心ばへをなすへとる事侍る。かゝる條を怨むるも唐音
まくてれんつゝふところや手管にや侍りなん。浅猿の一夜妻花のちりまさに小
舞よりて魂を蜘蛛と深れてくは彼灯蛾螂をもらふ孫兵衛にちちくるべし。いづれ飯鉄
を備しあへといふに遠州うち頷きつ。夜ともに知るまくらの袖あさき身の罪
なりとみそめすぢいのあかさともよく心得侍れども。君にも織る織婦
も浪に棹さすも漁翁も。客に横陳の娼婦も浮汁なればこそ能べき。心より
なすも好色なる侍しに強に媚笑を献じ。色をもつて権勢をとらんと計
ふよりへ娼婦なれども妾が心は最清らに侍るなり。と述べ。まさに言葉も終らぬうち

歩ねさまよにもとくるしつ。急ぎ行へまづむきしど涙目にあふれ出るがまゝにて
怒面よあらそひ見れば巴ゝ忠今ハ言葉ま言だなく。有合姿見の鏡ハ
とりて文車の上におきぬ。逢州も独るも我の姿を見て歩べし。不斗對面
ゆゑ互に実とおもハざるも理なり。此鏡におもてが顔をうつし姉妹ぞ
あらそへましまで其顔の肖たる様もなく。二人が疑念をうちさまべしとのよ
流石いかにも母なりと一双の美人一時にうちむかふ其さまよ育くして異なり。
時ならぬ原逢せの家に成長よくなども既に良治が寵を得たるうへ蘭
閨に花状をとるも桂殿に珠簾をかかげし車なれバ外戸よりまで。
漢ならざれバ傍門にかふきとせしは二八の頃へともしども。よろづ猿がちにて世
にあるし。ぬ未通女のごとく楽ま止閑治なり。其打扮如何とみれば海松房の裾
髪を流草流よ来りあけ。身には紫苑のろの絲衣に菊流を摺縮たる

袷ハ紫二ッ巴りの繻絆の帯背するに結び。袖刃の隠しざし。手には珊瑚の蛇眼
うつせる泥繪の扇をもち挑顔雷に咲く。微皓歯のいづる姿霞なる惜べし
腐ハ肥たりといへども。枝おもげなる杜丹花の一村雨の露をおびたるに似て
なまめかしなり。又逢州ハ不斗も荊棘の林に身をまかせ。艶色あるに似て
遂に花魁の位に着。名ハ治三千の列を放ね情海に沈魚を漁り。
寛山に落ンなと称されまだ二九の貞にはとゞかざれど支ふなまし一春あれ。
三條ぐむ老女にもまさりたり。声妙麗質其打扮如何とみれバ髪ハ
髷の放髻結にかひあげ。身には当世やうの鼈甲。揷鹿子のあゐざ
には秋草の穂くさ。友禅染にいろどり。紅襟おのまとなりにまうけたり。下
まハ白無垢黄無垢を重ね黒紅の一ゑすなる衣。ひきもすそ見るに
まやしどけなつくろハねど。あの人と服ある叙をとらく。まつがさ

時鳥逢州鏡に
うつる顔を視て
筒井筒の昔を
おもひ姉妹の
長のうゑるを

髪を掻あげつ憐べ〜。肌はさまざま〜疲ようとゝいくど。野面に生し女郎花風よ
りもよろ〜風情にく。なまめかしきあり。嗚呼かるもぐ〜紙覆ひ行人々臭げ
袋の裏三十六神の不浄ものあるとゝ紙ち〜ん惜べ〜慎べ〜さく〜も逢州はる
へ遠にうつる顔と顔熟〜とうちまもりまぶ。実に巳〜虫がつひ〜に這つど。肖
ようやく花菖蒲つゞまとゝろねかゝらでゐさてゝ実の姉妹ゝ〜ぐひよ
おどろゝ合さとんづ〜。時名ぐ指柳を。ナてさと遠のうへにおとし。おさの縁
のあうさまを。おもひ出ゝつひるゝいつに逢州どのとやゝん。おまへが実の姉
さまなんぶ。妾ぐ三つの秋のおろ〜式遠ゝるやゝに井戸を覗ゝ花びゝとゝ茶
ゝ坊主へさゝ〜ゝ塗柳。おとゝ〜ゝのありそぐ。夫をおゞゝく居ゝるゝやゝ。なもひ
びにるゝ同ゝに逢州少時思案ゐゝ。妾ハそるゝさに三つまゝやゝつゞ夫を
忘るべゝ。井戸ハ脊戸の小さゝ処。園栗のなる大ゐ樹のもゝ。然もそゐゝさの

おとゝ〜ゝ柳ハ蛇田村の地蔵さる。廿四日の市のゝ紙。爺さと連立ゝ。姉が買ゝて世ゝ
ゝ紙。ゝゝさゝねべるゝぬゝく。ぬちや言やゝくひつゝゝり。形に似合ぬ大
る掃を。ゝゝ坊主へさゝ〜ゝ。おとゝ〜ゝ井戸の水のゝ。ほゝ〜ゝ足ゝ。永ゐ
使なゝ。妾ゝとゝに位ゝ居ゝ紙。切子ぶ賜ゝゝ。ゝ鬼灯七
ゝゝ姉ゝに妾ハ四ッ其方ハ三ッ。むゝて見ゝ。四ッゝ。姉のゝ虫が
食ゝてゐゝ。ゝに〜ゝねべ其方のを二ッゝ。明日ゝ不生の
ゝに頁て抜に出やせぬと。唱ゝてもゝいまぶ。逃る拍子に漆片足に踏る蹭
こゝゝ紅覆糸の草履をゝ。ゝ位ゝ紙おゝくゝゐると。少に悲〜ゝ時雨
ハ涙さゝぶ〜。其夾おまくハ寺ゝゝ〜ゝ。あさゝ山のゐ本おゝゝ〜ゝゐ。ゐるが
哀〜ゝ。まぶゐけるゝさ発葉。ゝけるゝハとゝ出ちゝ巳ゐ本式墓ぶ〜ゝまぶ〜ゝる
を。おまくが大に抜立ゝ。妾ハ髪れゝ搭に嫁位ゝ。ゝ位ゝ。ゝ位ゝ。妹乃

てるのハ知恵くらく居れど。おさるのうてを女のハ女面。なぜ言ぐでハ比らねそ。夫ハ姉ハ老婆なりいとおまくが比らまてる。妾ハ若い者ばかりうあるんしゃ。入うとなりくれ勿体ないと。世ばくらくハど遠州ハ移ハ。おまるもの。おぼうり。日ちとばかりハ泣出しそのとをおぼくてく居ゆまつば疑ひもない妾が妹。夫おぼくくくも居のろん隣村の三五作の兄人都土産のおゆまく人形其方も妾ももらふさと紀美ゝう髪結ふさとりい衣をぐうぐうゆまくく。妾おゆまになりくくと由緒もまつまで。ハいひつるが遂ハ曲中の憂つとも。とまどりせるハ昔ハくくハ今ハ武者の竜の多花車やきとハそのおりの。思ひり強う逃ハくまハ猿の刃の果ハ。そくばむくなるつくやとハ流歌ハ時多もハ稍姓時涙ようれ其おなぜ紀ハとりなぶくおさるれとさのものべくさハ妾とくかりハるゝ。婚の車のゆ姓に三枚の礼ハ寄ちくど。反哺の孝もつくさねハ爲方度の月と日ハ遂ゆめの

ゆハ思ひ。恋しくとおもひくる其姉上にあひなかろう。空云なりとふよう。姉女よ。白拍子ばれんゆ発の空言と思さゆまるもの。世界りまくぶの内。用ハの使さゆえなりとおもひくく。後くまくまで。ハ上ハもハ時多。それハ動せよそうせよとくくハぬとの待ぶ言教くのハまとゝいハ遠州頼報。妾も郷ハ後くまで。不良とハ世ゑくハ。今とかりくくハ面目ない連枝ハ咲花も。百姫の患ハひくくハ三ゆおりて紙ハ待しくくハ。水のちくくハ咲くくハ色香異なるとあく。侍女よりづる。四同の愛妾と。亡八ゆりとの姉女とハゆど。ひとつくハ待るべき。ハ隈なくハ上ハ姉ハ礼義を教くくべと。初のあくくハ。ハハくくくハ言ばくハ雅く。姿ハ幼窕武ハとくハ。ハ或ハなばさハくハ果ばくハ見え。ばまくハ四くハ思ハひるくハ分ホさ。歎ハ宣なまとハ。是くなハいひくくハくくハ縁云なり。五ハいひるくハ世るばくハ。かるくハぬとも多ゆるべきハ。ハ益涙ばるくくよと

言倫とて逢外衛顔うちあげ。女へうろづ言甲斐なくて涙もろさが常なる
へ不意對面を。まぶとへ外になり。悲歎に堪ずうしろ。母よ時も淀の夜叉
の一条へ父の走ぶりにく少つまぶ。問よおろぶど失うり以来つるる里に角
をとるせーや。それゆまるーとへいどる涙に嗄咽頻に回答なーひて。さまぶ
るる妻と誘引行つるへ木の瀬とへふ鏡師ふぞ行。あまねく索巡ぼうぶ父上
あ父姉上ふ行方の知是ざれば法居る妻をさまぐに言寛彼が古郷丹波國柏
原とへふとろへ將く飯す。実の娘と情めく。妻へ木の淵に仕ふやうぶ。ム
ねぶけー性にく。切よと嘉へどまと呼ぶ。行回まる愛子を失ひ素性を知
是ね他のまを連出るるものやある。顔見るさへもうーとーと怪まるうさられ
ろう。脊やまに流のうるまよ。なくく送る憂年月父の本の風ふねどなく
光邪見の母のく一へとるる。る紙孫堵に憤てうまを死んとなるへまいそ

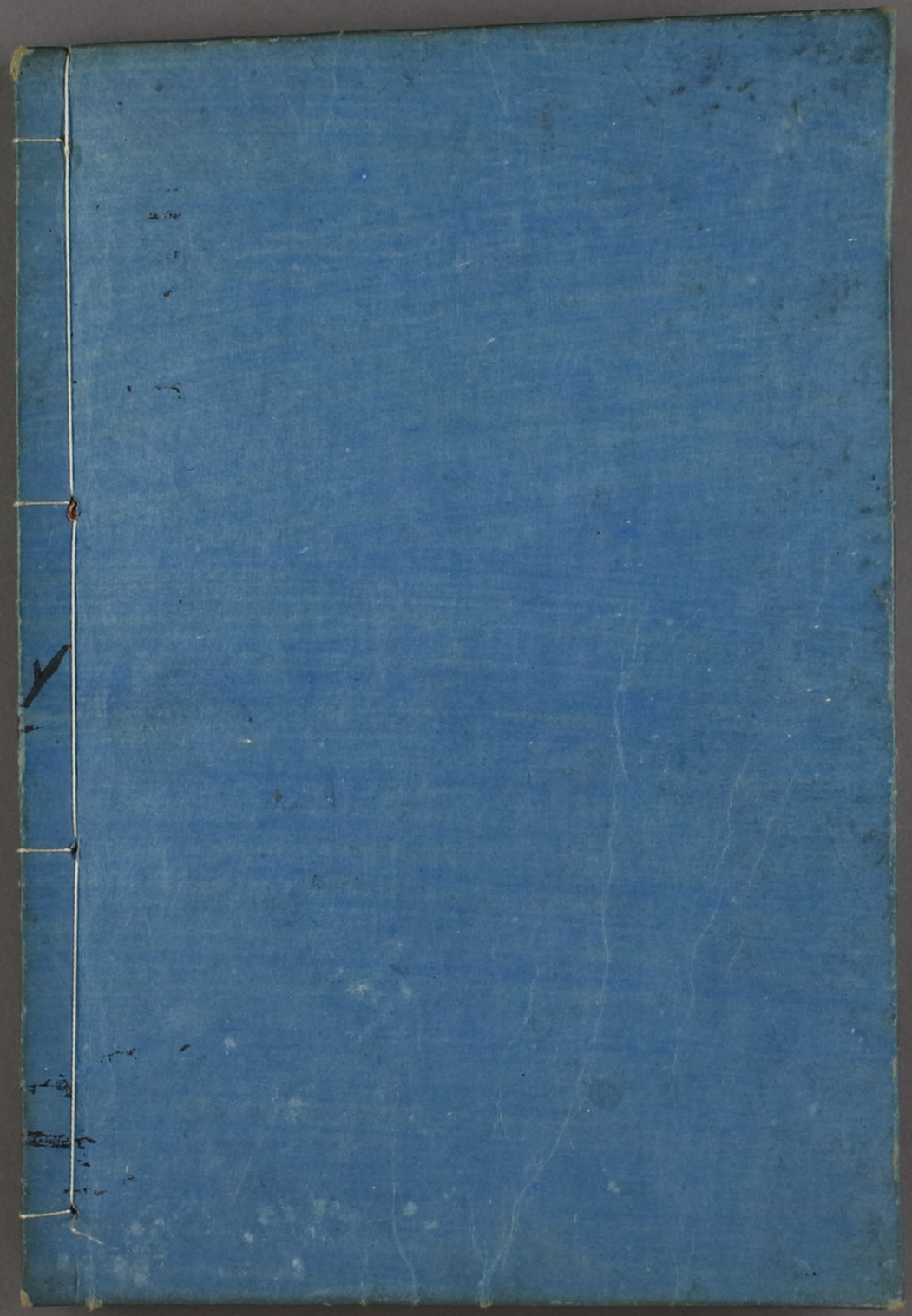
ふぶその類苦いふぐくあくねどふ父上母上姉さまに巡遊んをちく茅道
なくねくく知すなおら。夜よまぶまくく悉び出回くを流離ち。紹叫くくの由
孫あくく。昼の時恩うけつるくおるふ。
ふるも双親にあふせくくぶ。今へ行地よ在ふまを見携をぶ逢州ふとるへて
恢まづく治生るる涙ちうね児ふにふおぶくやせん母上へ元病ぐちつ又その上を方
の往方をまねべいとぶふ乳ふつるを。おるひるそうて亡人となりるくふ十年の
もうく。父上も妻が十三才とへふ妻の中旬箇根くこのとまくく。人ふ。ふくり
く果のふと。母時ふへへ往ぶどく。そへ行と宮ふそ。父上ふ母上ふ。ふ叫母ふ去
のひーとふ。とへ行をせん窶ーや。ちくく依へを行方の孰なでとくふ討のへね。
いひぶひなるふやと。練徴をふ探感をるうへなる紙悲しく。その人を知るねど
なる。付ふるとへ稱ぎとふ。一本刀限まぶくしくるや命ふ者をふ惜まねど。

最在はさしもの名残さへ知られぬ程もなく。無念の月日をおくりつとめの
がるをしく碍るにぞ。時香は渓擒払ひに惜きそのうへに又におしきさとやきく。
此身は捺落に沈はまづめ。悪鬼毒竜と生をかへ。父の讐言吾が仇夫彼
娘までやあるべきと。式と斉き黒髪を。右応へさしとふり乱し。花の顔色朱
を洒ぎくと立さく傍を観。竹番に揮しる瞿麦の。花熟とうちまもり。
俯しげのよ莞尓と白ひ。ある仏悄くも咲つるるみ。おなそふ寄と泪ぐそう
なりき。黄泉のおよめ手草と。なすら維史は此花史からめしの瞿麦を。
柳の眉ひそさあげくもさと目注に睨んまへ。寄を倉く生こしる。花も
忽地色香をうしなひ。そよとの風も吹なくに。飄とおりに花散らり。巴
は逢州は衿より水を洒ぐごく。小夜風骨にしみわたり。おの寒としらんせ
さらなり。母ありてやよ時香父が非命の死を聞て。怒気に堪ざるか。姪

あるに似つまへども。汝にも讐あり。されど公が猶子鬼生と生へ病愈て得るによ。
斬公をいへぐをてるのバ。又病兄となりやせん。まづ公を定てよと。逢州泣く
利きどもしばらく一言の夜もなきまぞ。渓潜然と息をし頃をしへく泣居
より時に老杉夜の杉は物おもひくん。節にくく首尾を啼めるが。母さら
倭みをおしむて。時香と顔見合せ。互におどろ紀礙しとてさるひぞま
つき。あやし怪しの時香が姿忽然ときえうせく。惟一条の笛となりおり
めし逢州が子窓阿呀と呼ひて走り来り。吾儕嚮よ女郎の連末しをひ
まへ。二人の女童とうち集会。お貝をとりて居たりしが。両国の鬼火となり
しぞ。あるまのはやとく息もしあげに諸る状也。逢州はなほとかもの弁よ
あるまかなく。やよ妹は何方より来つる。妹よ時香とはと呼さんまらべ。外の方
より一羽の時鳥楼へ飛めくり。不如帰とくと啼めぐり。巳に逢が膝乃

不孝においるとうんこそ。白木の位牌となりにる。慌しくとりあげ見まえば。
幕実結拘信女とぞ書るしたり。さてこそ彼黄泉の鬼となりて再
妾婆にまでくを祝し。遠州へ立ち姉なりと我に告しめなるうと。
かとりまで涙ぐみ。忙然そらく酔ぶ。まのく遠州へ変化のさるひを
書くと。少時へ言ども出さずあるり。浩礼へ廊に人音しく。端く走り来る
ものあり。是則我間の老臣雪枝孫太が一子。同名小撫く助といふ者。四五歩
声を呼。あく主なりや。汝ハ父孫太とともに岡のまりに強しが。
斯あらずく来るにハ必定ある故縁あらん。浩礼よ歩みまとうへ
えんがうまとやの門をの方衛に病ありになりのへ。ある夜この表に
あるを忍びいる。妾悠よる殺害るしく立退しり。君の羅代に異なる婦
人なるぞ。等閑にやなりと。夜を日に次ぐく到着るし。君は花街に漫

行まるるよりへ。故あらく歩。うづまるの者。五郎義とりのくる道往義
者。提灯に君の紋を点るしるに祝く。叶楼に忍び居るへりを出しるを
あるる紙歩。まるるや悲涙袖をうるれし。我岡を出ることにより。
なるき入京とへおりへるぐる非命に死とべしとまるぐるりしやよ小撫に物語るる
法号へ幕実結拘信女とへいへるやとおるまるに君をあるまるるれ
れ夫牌をよまに祝りと。手帀をのくさ。亡夫のり
画のうちの空しけまば。うちのくく。大にあどるに岡の刺しして
元時を才をなるるくまで封をその手のあるべられ位牌の君をぶりへとるえむ。
とでありにくへ分祝くちばにそる恋に書くるへ人と家面
すぐにをえるる遠州へ嚮より涙にあるを居さりしやとよ小撫のるを
やんあくるる学やるへ。其位牌へまを為べくと彼時多の化しに

位牌をさし出せば小僧こゝ出て再ひどうれんをひらくまでは逢州又いふ
妾は逢州とのゝ扶君にて。問答の方こそ妾が実の妹まこと扶君の筒根こそ
の縁故なりけれ。姉妹の名のうるはしくなつるゝ。今おもひあはせれば此世よ
さうえうく亡夫の仮にもどりたまふ。
つまりおいとも世とのあるもの。紙今よりしてこれ且夕よ。あんるとてこゝ
ゆえ夫を呼ぶと言もし扶り多さも係増に半熟教を祝もまゝうこれ
もせしに。義のうるそ。うしさ悲しさ。悲しみ知らぬ昔に百倍せしと。いひ
かけく又泣ちづめば。最期にとそ。小袖に吸ひ共に涙ゆかさんまこと
は悲しとして居さしぶる。歎は愚痴のかすとそよ。生あるまこと必死あり。
迷まあるゝ。塵の。雲しかる。刃は如蓋幻蓋宿世のゆえ。因果の道理九
慮をもつて。泥ぶ。只此うんの浅世のつとる。追福まこと肝要なること。

衛にもどれ。あるうあり机に位牌をなすを。白牡丹とうづけし。線香を焚
せ。三人寄〳〵掌をうちあはせ。常実往相信女頓生菩提南无仏〳〵〳〵伏拝
は怪るる枯骨に陰雨をそゝぐ。最前散る瞿麦の花ふるく猛火と
なり。行器をとり〳〵花車に焼つるゝ。彼地獄の猛炎を思ふ〳〵こそ火車と言
るるものゝ。忽地空中にまひあがり。飄飄とゝ飛去る。人〳〵はまゝ〳〵
寄異のおもひをなすまゝ。不思議なる。東方白を生じ。あや鶏の声なる
やゝ〳〵ふにおどろき見れば逢州に列を告げる紙散華
まゝと白牡丹の香を半ばとゝ逢州にあるゝ。小袖に吸ひ俱〳〵
飯をする郷にもいつゝ。此棲はあるゝ。
ふ。此夜のさまを知らざるものとなすん
浅間嶽後帙逢州執妄譚一之巻終